

琉球大学学術リポジトリ

四技能を統合した日本語教授法 —プロジェクト・ワーク—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教養部 公開日: 2007-12-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 尚美, Kinjo, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2708

四技能を統合した日本語教授法 —プロジェクト・ワーク—

金 城 尚 美

1. はじめに

外国语教育においては、文法・文型の言語の構造と正確さに重きを置く教育ばかりでなく、言語運用能力を養う教室活動を取り入れ、実際の言語使用場面でのコミュニケーション能力を高めるような指導も同時に実行なければならぬ。また教室活動として最も理想的なのは、言語の四技能と一般的にいわれる読む、書く、聞く、話すを統合的に学習できる授業状況を設定していくことと、学習者の興味や関心、知的欲求に応じた内容を学習項目として組み込んだカリキュラムを構成することである。

教室という枠を取り払い、四技能の統合的言語活動を通して外国语を教授する一方法として「プロジェクト・ワーク」がある。プロジェクト・ワークはコミュニケーションタイプ・アプローチの中の方法的アプローチとして位置付けられるものであり、その手法は、学習者の動機を高める教授法として日本語教育においてもさまざまな形式で次第に実践されてきている。

琉球大学においても1993年度前期に開講された日本語IIIのコース（中級レベル）で、言語技能および言語運用能力の養成を目標として「プロジェクト・ワーク」を試み、ある程度の成果を納めることができた。今回のプログラムでは、(1)学習者自身の関心のあるテーマについて日本語で情報を収集する、(2)情報を収集したりまとめていく過程で道具として日本語を使用する、(3)調査結果を日本語で発表する、の3点を主な活動目標とした。

本稿ではまず一般教育におけるプロジェクト法の意義、また外国语教育におけるプロジェクト・ワークの意義について述べ、本学で行ったプロジェクト・ワークの試みの方法、内容、構成とその結果、目標達成度や学生側からの評価について論ずる。さらにプロジェクト・ワーク実施上の問題点や今後の課題について考察を加える。

2. プロジェクト法

学習では単に知識を獲得するにとどまらず、獲得した知識を用いて問題を解決する能力を身に着けることが重要である。知識を知識としてとどまらせず、その知識を使って基礎にある問題を解決したり、ある課題を遂行することによって学習を促進する教育法に問題解決型学習指導法がある。その一つに位置付けられるのがプロジェクト法（project method）である。

プロジェクト法とは、目的的な一定のプロジェクトまたは一定の計画的作業としてのプロジェクトを遂行する過程において、必要となる知識や技能を習得させようとする実践的な学習指導法であると定義づけられる。このプロジェクトという概念を最初に打ち出したのはキルパトリック（Kilpatrick, W. H., 1918）¹だと言われている。彼はプロジェクトという概念を目的ある行為で展開される全精神を打ち込んだ活動として捉え、このような意味でのプロジェクトを通じて複合的な学習を促進する方法をプロジェクト法と呼んだ（森正 1993）。プロジェクト法は、伝統的な教科指導が学習者の興味や関心から遊離し、形式的・機械的な指導に陥りやすいことへの批判から考え出された方法の一つだと言われている（森正 1993）。

プロジェクト法は、特に外国語学習においては単に知識や技能を習得させる方法としてよりも、既習の知識や技能を有意味に体制化し、活用する能力を形成する方法として有効であり、特に学習過程の適当な段落点においてプロジェクト法を実施することは非常に効果的な教授法であると考えられている。例えばある学習期間の中間目標または最終目標とする、あるレベルでの学習のまとめとする等である。

特に近年になって外国語教育の分野で改めてプロジェクト法の学習形態に注目し、実践的具体的方法を提示したのはFried-Booth（1986）である。彼女は英語教育におけるプロジェクト・ワークの可能性を教師のためのリソースブックとしてまとめた。プロジェクト・ワークが外国語教育でも導入されてきた背景には、外国語教授法の視点が従来の項目積み上げ式の文法中心型指導からコミュニケーション型・アプローチへ移行してきた歴史的な流れがある。また従来の教授・学習過程が教師中心の形式から学習者中心の教授形式へと変化してきた

ことも影響している。すなわちプロジェクト・ワークは学習者中心の指導形態であると言える。

3. プロジェクト・ワークとは

コミュニケーションを重視した教授法として、シミュレーション、ロールプレイ、プロジェクト・ワークが代表的な教室活動としてあげられる。その中でプロジェクト・ワークの代表的な形式は特定のトピックに関して研究・調査を行い、その結果を報告書の形でまとめ上げるという一連の活動である（岡崎・岡崎 1990）。例えば、あるトピックに関して、学習者は調査項目を決定し、その項目に従って日本人にインタビューしたり日本人からアンケートをとったりして情報を収集する。また必要であれば、トピックに関連する記事を新聞、雑誌などから拾ったり、本で調べたりする。あるいは日本人の行動を実際に観察することによってデータとする。このようにして集めた情報を基に最終的に結論を出し、まとめ、報告するという形式の学習活動である。

外国語学習でのプロジェクト・ワークでは、クラスまたはグループで何かのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用していきながらターゲットである外国語が意識的、無意識的に学習されると言われている（田中・斎藤 1993）。従ってプロジェクト・ワークは、最終目標に到達するまでの「過程」が重視される学習活動である。またコミュニケーション・アプローチの実践的教室活動の中で考えると、通常の教室活動で行われるタスクが小規模タスクであるとすれば、プロジェクト・ワークは大規模タスクとみなすことができる（岡崎・岡崎 1990）。

プロジェクト・ワークの典型的な流れは、次のようにになっている（バルタン田中他 1988）。

- (1) オリエンテーション
- (2) タスクの理解
- (3) 学習者がアイディアを出し合う話し合い
- (4) 教室外の活動に必要な言語の練習
- (5) 教室外活動の準備

- (6) 教室外活動
- (7) 情報を持ち帰ってのまとめや報告
- (8) 収集した情報をもとにした資料の作成
- (9) 完成品を発表する報告会の実施
- (10) フィードバックのための討論と事後の手当

プロジェクト・ワークでは特に、(1)生の日本語に触れること、(2)学習者が自分達で進める学習活動、(3)異文化接触、ということが目指されている(岡崎・岡崎 1990)。これは教科書を中心に進める通常の教室活動と異なる点で、実施にあたっても普段の授業と違った難しさがあり、工夫が必要である。

プロジェクト・ワークには母語話者とのインターアクションのタイプによって①成果発表型プロジェクト、②調査型プロジェクト、③共同プロジェクトの三つに分類されている(田中・斎藤 1993)。成果発表型のプロジェクトとして、新聞作り、情報パンフレット作り、料理会の開催がある。これはプロジェクトの中心的部分は学習者のみで行い、その成果を日本人に見せることによって(例えばできあがった新聞を読んでもらう等) インターアクションを持つといった形式で、日本人との相互作用は部分的である。調査型のプロジェクトはある問題について日本人にインタビューをしたりアンケート調査を行った結果をまとめていく活動で、商品調査、意識調査などがあげられる。調査型プロジェクトは成果発表型より日本人との相互作用が増す。共同作業型の例としてはオリエンテーリング、機関訪問、見学、公共施設の利用、など様々な活動があげられるが、そのグループのメンバーとして日本人と一緒に参加してもらい、活動を共に行う形態である。

共同作業型がもっとも日本人とのインターアクションが豊富なプロジェクトであり、日本語を使う必然性が最も高いプロジェクトでもある。しかし具体例としてあげた各プロジェクト活動は、発展させ、母語話者との関わり方を増やしていくことによってインターアクションの豊富なタイプのプロジェクトにもなりうる。例えば調査型のプロジェクトであっても、その結果を日本人の前で発表するという場を設け、その結果に対する意見を聞き討論するという段階ま

でもっていけば、日本人との接触場面が豊かになるであろう。

4. プロジェクト・ワークの意義

プロジェクト・ワークのような学習者を中心とした教授スタイルの最大の意義は、通常の一斉授業ではテキストの中、教室の中で終わってしまうようなことが、現実の言語活動に近い形で学べることである。その他、以下のような点で教育的効果が認められると言われている。

4-1. 四技能統合

外国語学習においては、読む、聞くの言語受容の技能と書く、話すといった言語表出の技能の個々の技能をバランスよく伸ばすことが目標となるが、これらの四技能はばらばらではなく、統合的・有機的に行ったほうが各技能が向上すると言われている（島岡他 1986）。このような学習状況を作り出す方法の一つとしてプロジェクト・ワークは優れていると考えられている。あるカリキュラムの学習のまとめの活動としてプロジェクト・ワークを設定することは、そのコースでの目標を設定することになり、普段の授業内容の個々の目標を明確にすると言える。

4-2. 学習者主導

近年外国語教育の分野では「教える」ことから「学ぶ」ことへと関心が移行し、学習者を中心とした教育が検討されるようになってきた。それと同時に学習者の自発的学習態度によって学ぶことに対する積極性を持たせるような工夫が考えられるようになってきた。プロジェクト・ワークはある手順に従って学習者が自ら活動を積極的に行いながら、目標を達成しなければならない。またその過程において必要なことを自分で学びならが活動せねばならない。プロジェクト・ワークはこのような学習者の自発性や自律性を高めるための学習環境を提供できる教室活動である。

4-3. 動機づけ

言うまでもなく学習効果は、いかに学習者の動機が高いかによって影響される。プロジェクト・ワークは、ある課題を達成し成果を出すという学習目標が明確であり、目標達成動機が非常に高くなるということが言える。また学習者の関心事や興味のあるトピックに関して活動を行っていくという点でも好奇心や知的欲求は、教師側が与える場合よりも強く、この点でも学習者の動機は通常の学習活動より高まると言える。

4-4. 学習者間の相互作用

通常の教室でのコミュニケーションの相互作用の形態は、教師から学習者への流れか、学習者から教師へという一方向的なインターアクションが多い。しかしプロジェクト・ワークの場合、ペア・ワークあるいはグループ活動による言語活動により学習者間の関係をうみだし、学習者から学習者への相互作用が増える（図1）。それにより発話の回数も増し、学習者の学習活動への参加度が高くなる。

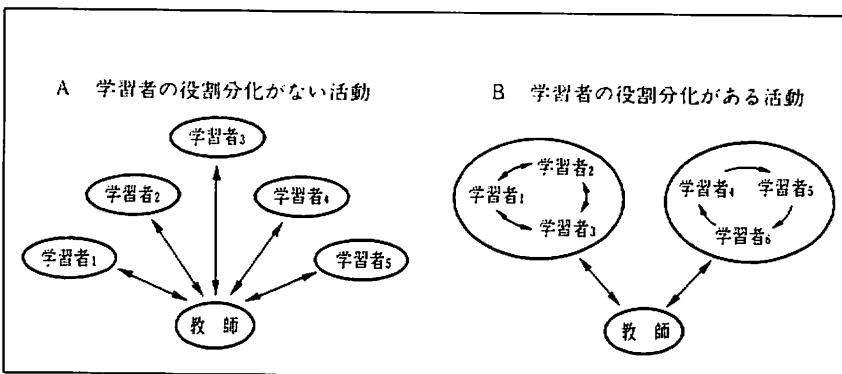


図1 クラスにおける学習者と教師の関係(田中・斎藤 1993 p-95)

4-5. 学習者のニーズ

学習者の日本語学習の目的は、進学や研究がほとんどである（別添資料5）。彼らの学習目的から日本語の必要性を考えると、日本語という言語を道具とし

て使用し、将来的には実際に講義を聞く、資料を集め、レポートを書く、自分の意見を発表する等の言語活動を行うことが考えられる。プロジェクト・ワークはこのような学習者にとって必要性のある現実の場面に即した言語活動状況を作り出し、言語学習ということを意識せずに学習を進めることができる。また学習者は日本語が話されている環境にいながら、同国出身者と母国語を使用したり、日本人と接する機会が少ないなど、教室外では日本語を使わない生活をしている学生も多い。実際に言語を使用する場面を教室活動でもできる限り作り出すことが必要である。

以上述べてきたことをまとめると、プロジェクト・ワークは次の点において優れた学習指導法であると言える。

- (1) 言語運用能力の養成に主眼がおかかれている。
- (2) 読む、聞く、話す、書くの四技能を統合した実践的手法である。
- (3) 現実に近いコミュニケーション場面、言語使用場面が設定できる。
- (4) 言語が目標達成のための必要な道具として使用される。
- (5) 目標が明確であり通常の学習活動より学習者の動機が高まる。
- (6) 学習者の自律性を高める。
- (7) コミュニケーションのためのインターアクションの機会が増す。
- (8) グループ活動により、協調性が養われる。
- (9) 知的欲求や好奇心が満たされ、達成感が高まる。

5. 教師の役割

プロジェクト・ワークを進めるために、必要な言語インプットや言語練習をさせることがまず教師の役割である。その他、特に学習者が中心になるグループ活動の段階での教師の役割は、間接的に学習活動全体の流れをコントロールすることである（バルタン田中他 1988）。例えば準備段階では、まず学習者の問題意識や興味を充分に掘り起こすことがプロジェクト活動全体に関わる非常に重要な鍵となってくる。またグループ内の話し合いの調停役となったり、出来る限り最大の成果があげられるよう示唆を与える、例示する、助言するな

どの誘導が必要とされる。さらに学習者の文章や発話をチェックし、訂正するなどのフィードバックを与えることも重要な役割の一つである。

厳密な意味でのプロジェクト法は、ある目標に到達するために必要な情報や技能は必要性に応じて学習者自身で収集され、また学習すべき項目も学習者自身の必要性に応じて決定されていき、目標到達までの手順や計画が全て学習者の手で行われるという形式である。これが最も理想的なプロジェクト法の形である。しかし言語知識がまだ十分でない外国語教育の段階では、ある程度教師の援助が必要である。しかし、どこまで学習者に任せ、教師がどの程度関与していくのか、どの程度援助を与えるのか、どれくらいの情報を提供するのかなどは、学習者の学習段階と年齢等の学習者が持つ性質に応じて変えていく工夫が必要である。

6. プロジェクト・ワークの実施

平成5年度の日本語III（4月から9月までの中級クラス）²において調査型のプロジェクト・ワークを行った。プロジェクト・ワークの課題は、日本人に対するアンケート調査とその結果報告である。具体的には学生が興味や関心のあるテーマについて主として日本人学生からアンケートをとり、それを資料として意見や感想などを報告会で発表するというプロジェクトである。アンケートは基本的に日本人を対象として行うこととしたが、グループの調査の目的によっては日本人と外国人学生両方にアンケート調査が実施された。実際には、表1のような手順でプログラムが進められた。

今回実施されたプロジェクト・ワークの特徴的な点は、日本語IIIのコース全体のプロジェクトとして実施したことである。琉球大学の日本語IIIという中級レベルに当たるコースは、3クラスあり、実質上、中級前期から後期までのレベルによって組分けされたクラスである³。通常テキストは一部を除いて異なっており、各クラスにおいて読解、聴解、作文、会話の技能を伸ばすための授業が提供されている⁴。その3つのクラス全てで、ある期間一斉にプロジェクト・ワークのプログラムを実施した。プロジェクト・ワークの作業自体はクラス単位で進められたが、最終的な報告会を3クラス合同で開くこととした。合同発

表1 プロジェクトワークの流れおよび学習者の活動と教師の役割

	学習者の活動	教師の役割
1. オリエンテーション	・説明を聞く	・目的・概要・手順などの説明
2. グループ編成	・グループ名の決定 ・役割の分担	グループ編成の実施
3. テーマの設定	・テーマを決める ・調査目的と調査対象を明確化 ・結果の予測	テーマ選定についてのアドバイス ・他クラスとテーマが重複しないよう調整
4. アンケートシート作成	・説明を聞いて理解すること ・結果を予測する	・アンケートの例示 ・質問作成法を説明する ・結果の集計法やまとめ方の説明
5. アンケートシートの作成	・質問項目を考える ・質問項目をシートに書く ・印刷する	・質問項目の添則 ・シートのチェック ・印刷手順の説明
6. 調査の実施	・アンケートの依頼とシート回収	・必要に応じて事前に調査協力を依頼
7. 調査結果のまとめ	・調査結果の集計 ・調査結果の分析 ・報告書の作成	・そのつど問題となる点にする適切なアドバイス
8. 報告会の準備	・発表資料作成 ・発表手順や発表内容を話し合う ・発表原稿の作成 ・レジュメの印刷	・資料作成、発表手順、発表内容に関するアドバイス ・報告会の案内作成 ・司会者となる学生の指導 ・ビデオ等の必要機材の準備
9. 報告会	・発表する／発表を聞く ・質疑応答 ・他グループへの評価	・報告会のスムーズな運営 ・発表に関する評価

表会を行うことにより、多少の競争意識をうみ、作業過程の意欲や発表に対する動機づけが一層高まると予想された。またクラス間の横のつながりを持つことにより、留学生同士の交流や意見交換の場が与えられるいい機会であると考えた。

プロジェクト・ワークの各段階の過程は、3クラスともほぼ同じペースで進めていった。

6-1. 学習目標

アンケート調査によるプロジェクト・ワークを通しての主な学習目標を技能別に以下のように設定した。

- (1) 話す：あるテーマについてディスカッションできること。
 - 日本人にアンケートが依頼できること。
 - 調査に基づいて効果的な口頭発表ができること。
 - 報告会での質疑応答ができること。
- (2) 聞く：人の意見や発表を聞くことができること。
 - 日本人と接して生の日本語が聞けること
- (3) 読む：資料を収集し、読むことによって必要な情報が集められること。
 - 他グループの報告会のレジュメが読めること。
- (4) 書く：グループの活動のメモがとれること。
 - 適切な質問を作成しアンケートシートが書けること。
 - 資料や調査結果を分析し、それまとめたレポートが書けること。
 - 口頭発表のための原稿が書けること。
 - 発表用のレジュメが書けること。

6-2. 期間および時間数

プロジェクト・ワークのプログラムは、夏休みに入る前の6月28日から7月9日までの2週間をかけて実施した⁵。計画段階で当初プロジェクト・ワークをコース全体のまとめの活動としてコースの最後に位置付けた方がカリキュラ

ム構成上も理想的であり、また教育効果も上がるのではないかと考えた。しかしコース終了時の9月は夏休み明けで学生が揃わない場合が多いことと、すぐに期末試験期間に入ってしまい留学生にとっても調査に協力してくれる日本的学生にも時間的ゆとりがないこと等の理由により、コースの中間段階の区切りとして夏休み前にプログラムを設定することとした。

日本語IIIの授業は、週4日、6コマ（1コマ90分授業）で、通常の日本語の授業を全てプロジェクト・ワークの活動にあてた。プロジェクト・ワーク実施には、10コマをオリエンテーションからまとめまで、また2コマを報告会に費やした。出来る限り学習者の負担にならないよう授業時間内で作業を終えるよう配慮したが、後に述べるように結果的にはやはり、授業時間外にもいくらか時間を使うグループも多かった。プロジェクト・ワークに関わる説明や各作業はクラスごとに進められた。以下にプロジェクトの各過程について述べる。

6-3. オリエンテーション

オリエンテーションでは、プロジェクト・ワークの概要、目的、方法、スケジュールの説明を行った。ここで重要なことは、プロジェクト・ワークとこれまでとの学習形態との相違を十分に理解させ、プロジェクト・ワークの過程を通しての学習効果を明確にすることである。オリエンテーションがしっかり行われなければ、このようなグループによる学習活動に意味を見い出せず学習意欲を失う学習者が出てくることもある。このような活動を行わせると、内容に興味を持ってやっていてもそれが言語の学習にどのような関係があるのか不安に陥り、時間の無駄であるといった不満を持つ学習者もいる（田中・斎藤1993）。動機づけや目標達成への意識を高めるためにも、オリエンテーションは重要であると言える。

前例があればその時の報告会の様子のビデオを視聴させたり、報告レポートを提示することによって、より具体的なイメージを学習者の中に作り出すことが可能である。しかし今回の場合初めての試みということもあり、例示することができないため、オリエンテーションにおける説明がより重要であった。

6-4. グループ編成

プロジェクト・ワークをグループ活動として進めるにあたって、クラスを1グループ3人から5人ずつのグループに分けた。学習者に主体性を持たせるため学習者自身にグループ編成をさせる方法もあったが、同国籍の学生が同じグループに偏ってしまい日本語を使用する必然性が軽減するのではないかと懸念された。そのため、男女比も考慮しながら講師側で協議の上グループの成員を決定し、グループ編成段階で何か不都合が生じた場合、学習者に不満が出ないよう適宜変更可能とした。その結果、3クラスで13のグループが編成された⁷。

6-5. テーマ選び

テーマの選定に当たっては、全面的に学習者に任せた。その際に目的や知りたい事を明確にし、調査によって得られる結果が何かを意識して考えるよう助言を行った。また自分達の意見や考え、自分達の国との比較ができるテーマを取り組みやすいのではといったアドバイスなども行った。さらに身近な大学生を調査対象としたため、その点も考慮しテーマを考えるよう教示を与えた⁸。

6-6. アンケート用紙の作成

テーマが決定した次の段階として、質問票の作成がある。作成に入る前準備として実際のアンケート調査を例示し、その結果のまとめ方と合わせて指導を行った。アンケート用紙を作成する段階においては、質問項目の数を適切な数におさえることと、アンケートされる人についての必要な情報（学年、性別など）をいれるよう指示した。下書きから清書まで終了したグループは、適宜調査する人数分の印刷を行わせた。被調査者の数は100人を目安とした。

6-7. アンケート調査と結果のまとめ

調査票完成後各グループ内でアンケート用紙を分担し、食堂や図書館など日本人学生が集まる場所へ行って調査を実施した。調査実施前には、調査票のお願いの仕方の適切な表現をグループによって練習させた。

各グループは調査後、回収したアンケート用紙からデータを集計をし、それ

ぞれのグループで結果をまとめた。まとめとしては事実のみを述べるのではなく、自分達の意見や調査前に行った予想や自国の状況との比較などを行い、結果について自分達なりの結論を出し、意見を述べるよう促した。

6-8. 報告会の準備

効果的な発表を行うために、グラフや図表を作るよう指導した。またレジュメは実際に使用したアンケートシートとともに小冊子の形でまとめることとした。そのために原稿を発表の前日までに完成させ、各クラスの代表者が印刷や綴じ込み作業を行った。

報告会の司会は、各クラスの1～2名ずつの代表者計4名で行わせた。司会者として推薦された学習者は、司会の役割やプログラムの進め方などを事前に打ち合わせ、簡単なりハーサルを行った。

6-9. 報告会

報告会の進行は、全て学生に任せた。各グループの発表持ち時間は10分程度とし、発表後、質疑応答の時間を設けた。また発表に際してはグループに所属する学生全員が必ず「話すこと」を条件とした。

学習者は各グループの発表を聞きながら講師作成の「評価表」にグループごとの簡単な採点をし、報告会の最後に一番良かったと思うグループに1票を投じてもらった。講師も同様に投票を行い、最も票の多かったグループを表彰した。また報告会の終了直後に簡単な昼食会を開き、お互いの成果に対する感想を述べ合ったり、クラス間の交流の場を設けた。

6-10. その他

グループワークとして作業がスムーズに進められるよう、またグループ間の作業進行の歩調を合わせるため、教師がベースメーカーとして果たす役割は大きかった。またコース全体のプログラムとしてプロジェクト・ワークを進行するためにはクラス内の引き継ぎばかりでなく、クラス間の連絡調整を行うことも重要な仕事の一つであった。各グループはその日の作業の進行状況や作業内容

を記録し、教師に報告するようにした。それを作業進行の目安とし、適宜調整した。今回のプロジェクト・ワーク活動には次のような資料およびシートを用意し学生に配布した。

- (1) オリエンテーション用説明資料
- (2) アンケート調査作成のための参考資料
- (3) 調査報告紹介例の資料
- (4) インタビュー依頼のための表現例資料
- (5) グループ名および役割分担記入表
- (6) 作業進行予定表
- (7) 活動記録表
- (8) アンケートのための質問記入用シート
- (9) 発表評価用シート
- (10) 学生の自己評価票およびプロジェクト・ワークに関する評価票

6-11. 反省点

プロジェクト・ワーク全体の流れはスムーズであったが、時間的にはもう少しゆとりが必要であった。特に発表のためのスピーチ指導の時間があまりとれなかった点は、今後改善していくべき課題である。

今回のプロジェクト・ワークの報告会に、何人かの大学職員や日本語教育を副専攻とする学生が参加してくれた。今後はこのような報告会を行う場合、ポスター掲示や案内を配布するなどもっと広く情報を流し聴衆として日本人に参加してもらうと、さらに発表をする動機が高まるのではないかと考えられる。また発表したことに関して何か一つテーマを取り上げ、日本人と留学生の間でディスカッションやディベートを実施してみるといった活動へと広げられればプロジェクト・ワークがなお一層学習活動として深められ、新たな教育的効果を生むことが期待される。

報告会の様子は、ビデオに記録しておいたが、このビデオを反省材料として学習者にフィード・バックを与える事後の手当てまでが、プロジェクト・ワークに含められるべきであり、それによりさらに教育的意義が高められる。しか

しながら今回は時間の都合上、細かいフィード・バックはなされなかった。記録ビデオは今後のプロジェクト・ワークを実施する場合のオリエンテーション等に利用できるだろう。

アンケート調査実施の際、クラスから学習者を自由に解き放したが、教師はその調査の様子を可能な範囲で観察するようすれば、クラスでの指導に還元できると思われる。例えば大学の食堂には喫煙席と禁煙席の区別がある。その区別を知らないで、喫煙について調査したあるグループは禁煙席にいる学生に主に調査を依頼してしまったというような失敗があった。幸にも調査の中間段階で気がついたが、このような事態を予測したり、教師の予想できなかった注意すべき点が明確になるであろう。

様々な不備な点、配慮不足な点があり、またねらいが充分に達成されたか否かは学習者によっても異なる。しかしながらプロジェクト・ワークの試みにより教師、学習者とも手ごたえを充分に得、これまでの学習とは異なった一つの経験を得たことは確かである。これは、以下に述べるプロジェクト・ワークに関する学習者からの評価、講師側からの評価によって裏付けられる。

7. 学習者による評価の分析

プロジェクト・ワークのプログラムが教える側の満足にとどまっているのか、それとも実際に目標が達成され、教育的効果があったのかを検討することを目的として留学生に対してアンケートを実施した。報告会終了直後のアンケートによりプロジェクト・ワークの活動に関する学生からの評価とプロジェクト・ワークを行う過程の自己評価をしてもらった。学習者の意見を聞くことは今後のコース・デザインのためにも必要なことである。以下その結果について述べる⁹。

7-1. プロジェクト・ワークの実施について

まずプロジェクト・ワークという活動を通しての日本語学習の経験の有無を聞いたところ、3人の学生を除く学生が初めての経験であった。既に経験したことのあるプロジェクト・ワークの内容は、会社を訪問しレポートを書く活動

や個人活動として資料をまとめて発表する活動であり、今回実施したグループワークとしての調査型プロジェクト・ワークとは内容や活動単位（個人かグループかクラス全体か）は異なっていた。そういう意味では学習者全員が初めての試みであったと言えるだろう。

図2は、学習者のプロジェクト・ワーク実施自体に対する評価を質問した結果である。これによるとほとんどの学生が「よかった」と評価し、好評であったという結果を得た。「良くなかった」と評価した学習者がいたがその学生は、人前で話すことや見知らぬ人に話しかけることが嫌いでどちらかというと内向的なタイプの学生で、通常の教室での学習活動においてもおとなしい学生であり、書くことも非常に苦手であった¹⁰。このような学習者にとっては、プロジェクト・ワークのプログラムは非常に苦痛であったと考えられる。必ずしもコースで提供される学習活動や指導法が、全ての学習者の学習スタイルや性格に適合しているとは限らない。学習者の学習スタイルとは相容れない活動を無理やりやらせてみても、学習効果はあがらないばかりか、学習自体も嫌いになってしまうことも予測される。このような学習者の特性も見極め、コース・デザインをし、個別にオリエンテーションを行う必要性があるだろう。万が一このように学習活動が合わない学習者がいた場合、どのように対処すればその学習者が納得して活動に参加できるようになるかという点は、教師として考えていか

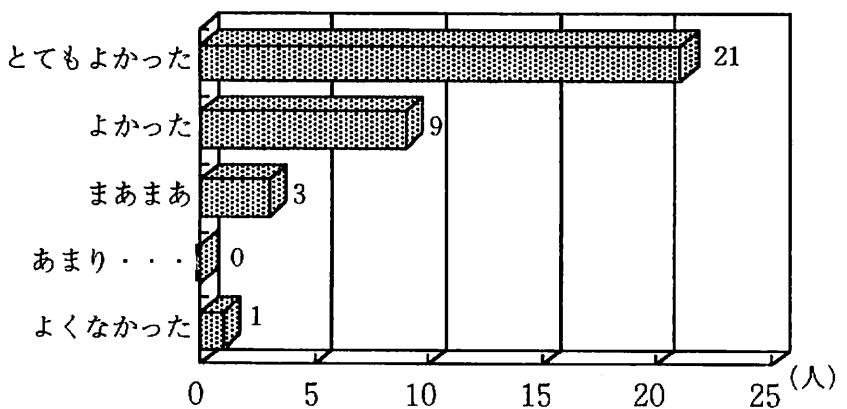


図2 プロジェクト・ワークは？

ねばならない問題である。

図3は、プロジェクト・ワークが面白かったかどうかの質問に対する結果である。この結果を見ても、35人の回答者のうち88%（31人）が「大変おもしろかった」または「面白かった」と答えている。ほとんどの学習者がプロジェクト・ワークに楽しく取り組めたということであろう。どんな点が面白いと感じたのかという意見を拾ってまとめてみると、(1)グループで活動できたこと、(2)アンケート調査活動、(3)結果をまとめる活動、(4)以前に知らなかったことを知ることができたこと、(5)いろいろなグループの発表が聞けたこと、(6)コース全体が全員集まり発表会が持てたこと、となっている。プロジェクト・ワークの意義の一つである学習者を中心としたグループ活動また全体活動が評価されている点は、非常に目的にかなった結果であった。さらに未知の情報を与えられるのではなく、学習者自身の手で情報を集めるという過程は現実場面に即した学習方法であり、発見的学習、問題解決型学習として学習者の自主性を養ったと考えられる。

一方、面白くなかったと答えた学生の理由をみると、資料を分析しまとめるのが難しかったためであるとされている。また他の意見は、プロジェクト・ワークの期間についての不満に起因しており、「充分な時間がなかったため」と答えている。

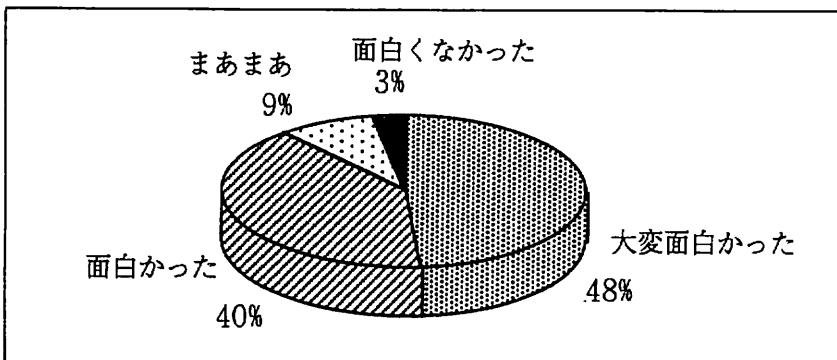


図3 プロジェクトワークの感想

7-2. プロジェクト・ワークと日本語学習について

言語運用能力を養成するというプロジェクト・ワークの目的がどの程度学習者に意識されたかのかを確認するため、「プロジェクト・ワークは役に立ったか」という質問をした。その結果が図4のグラフである。「調査は初めての経験だったが、それを外国語である日本語でやり遂げ発表も日本語でやったことは、日本語の能力を高めるのに良かった。」という学習者の感想に代表されるように、ほとんどの学習者、33回答中29名が何らかの形でプロジェクト・ワークは役に立ったと肯定的な評価をしている。

「どんな点で役に立ったと思うか」に関するコメントをまとめた表2を見てみると、やはり言語技能に関して役に立ったと述べた学習者が多かった。特に口頭発表を含めた「話すこと」に関して日本語力が向上したと感じた学生が多くいた。特徴的なこととして四技能の中で、読むという活動は意識して行われなかっただと言える。これはアンケート調査という活動内容が読むという技能をあまり必要としなかったということであろう。プロジェクト・ワークの期間の時間的制約が、文献を調べて情報を収集する活動まで広げることが難しかったということも、読む活動が意識されなかった理由として挙げられる。

言語知識の部分で日本語力がついたと感じた学生のコメントをみると、新しい語彙の習得という点で役に立ったと述べている。ここでの新しい言葉とは、活動を進めていく上で必要のある語彙を学習者自身が学んでいけたことを意味していると考えられる。特に「グループで話し合いながらわからない言葉を学べた」といったような学生のコメントはグループ活動としての効果の一つの現れであると判断できる。

その他「プロジェクト・ワークを通して日本人の考え方などが学べた」という意見や「グループ活動によって人間関係の円滑化や協調精神などについて学んだ」という副次的効果があったこともプロジェクト・ワークの教育的効果の一つであろう。また「自分に自信を持たなければならない」と意識した学習者がいたことも注目すべき感想の一つである。このように学習者に積極的な自律的学習態度の養成という点でもプロジェクト・ワークが効果を発揮したということがうかがえる。

表2 役に立ったと思う点

言語技能	聞く	<ul style="list-style-type: none"> 他の人の発表を聞いて、自分の日本語の発音やレベルがよくわかった 日本語（発表）を聞くこと 日本語を読んだり聞いたり話したりしたこと 日本人の学生と話しができたこと 話をしたこと（2人） 日本語で考えて話したこと 日本人とも外国人とも話すことができ、これからも交流ができるので、自分にとってとてもいい勉強になった。
	話す	<ul style="list-style-type: none"> 話しをしたこと（2人） 日本語で考えて話したこと 日本人とも外国人とも話すことができ、これからも交流ができるので、自分にとってとてもいい勉強になった。
	発表	<ul style="list-style-type: none"> 発表の能力の向上に役立った（2人） 口頭による発表力の訓練 司会をつとめ大勢の人の前で日本語で話しをすること
	書く	<ul style="list-style-type: none"> 書くこと レポートを書いたこと 日本語でアンケート用紙を書いたり、発表して話せるように練習したこと 文章を作ったり、話したり、漢字を書いたりしたこと
	全体	<ul style="list-style-type: none"> 全般的日本語の実力の向上 自分の能力の向上 日本語がたくさん勉強できたこと 勉強した日本語を活用することができたこと（2人） 総合的な日本語の練習
言語知識		<ul style="list-style-type: none"> アンケートの書き方や仕方が勉強になった。 新しいことばを知ることができた 語彙を増やせたこと いろいろなことばが覚えられたこと いろいろな新しいことばを覚えたこと グループで話し合いながら、自分のわからないことばをたくさん勉強できたこと
社会的文化的知識		<ul style="list-style-type: none"> 日本の若い人の考え方を知ることができたこと 日本人の考え方方がよりわかったこと 自分の選んだテーマについてよく知ることができたこと 一部ではあるが日本人学生の考え方を知ることができたこと 疏大生の生活を知るために役立った
人間関係		<ul style="list-style-type: none"> クラスの友達とより親しくなれたこと 人間関係を勉強するのにもよい機会だったこと アンケートを作ったり、集計をしたり、グループでがんばって活動したこと
その他		<ul style="list-style-type: none"> 日本人と出会うチャンスがあったこと 自分のまちがったところがはっきりしたこと 自信につながったこと 自分に自信を持たなければならないと思ったこと

「日本語能力が向上した」という達成感を持った学生や「これまで学習したことを利用することができた」というコメントなどを総合すると、プロジェクト・ワークが日本語の能力を伸ばす上で効果的な教室活動であり、プログラムの目標がある程度達成できたと言えるのではないだろうか。

7-3. プロジェクト・ワークの期間について

全体の40パーセント近くの17名の学習者が2週間という期間について「ちょうどよかった」という評価をしている(図5)。長すぎるという意見はないが「長い」と答えた学生は4名いた。逆に「短い」という回答が9名、「短すぎる」が4名で合わせて13名が短かったというマイナス評価を出している。今回のプロジェクト・ワーク全体の中で個々の作業過程についてみると、報告会の口頭発表練習を行う時間が少なかった。これは今後改善されるべき点である。また期間が短いと回答した学習者の中には「普段の授業をしながらプロジェクト・ワークを取り入れたほうがいい」という意見もあった。それも検討すべき点であろう。

授業時間外に費やした時間についてのアンケート結果をみると(表3)、一

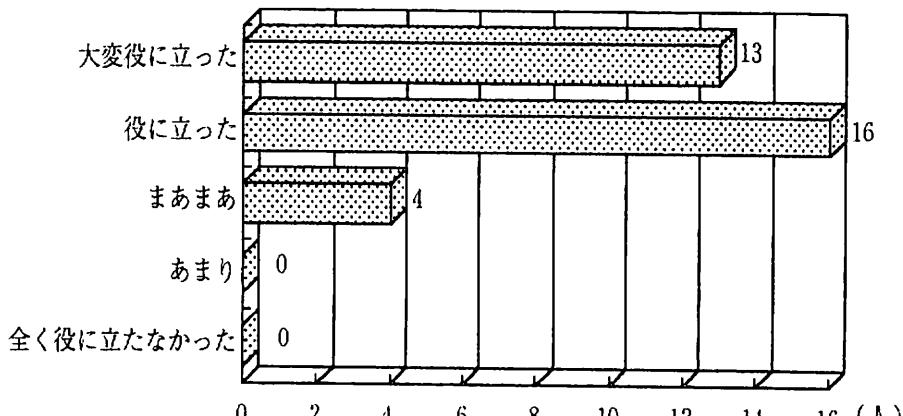


図4 役に立ったか

番多いのが5～6時間程度（11名）であるが、それ以上の時間を費やした学生を合わせると17名で、特に11時間以上を費やしたという学習者が8名いた。学習者の時間的な負担があまり大きくなると学習に対する意欲を失わせる結果にもなりかねない。この点は今後注意を払うべきであると考えられる。

何のために課外時間を費やしたかをみると（表4）、最も多いのが「調査結果のまとめ」で、次に「発表用のグラフ・表等の作成」や「調査票、報告レポートの清書」となっている。特にグループで一つにまとめるものは全員であるわけにはいかず、このような作業を分担された学習者が個別に扱う作業であるという性質上、やむを得ないと考えられる。ある個人の負担にならぬようグループ内でうまく役割分担がなされていなければならない部分である。アンケート調査の実施もグループの成員全部が同じ数だけの調査票を分担し、責任を負わなければ、日本人との接触場面を持つというプロジェクト・ワークの目標の一つが果たせないことになる。このような点にも十分注意し、全員が調査にあたるよう教示を与えなければならない。

以上のような意見やアンケート結果等を吟味し、どれくらいの期間がこのようなプロジェクト・ワークで必要であるか、適切であるかという点は、個々の

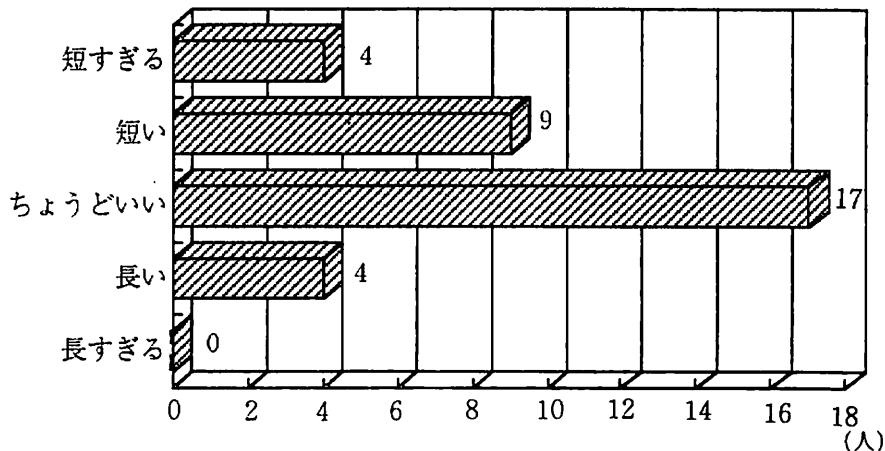


図5 期間について

表3 課外に使用した時間

1～2時間	3人
3～4時間	3人
5～6時間	11人
7～8時間	5人
9～10時間	4人
11時間以上	8人

表4 課外時間の使用目的

テーマの決定	1人
調査項目の作成	4人
清書（ワープロ入力を含む）	7人
アンケート調査	6人
アンケート集計	2人
アンケート結果のまとめ	9人
グラフ・表等の作成	7人
発表準備	1人
討論	1人
資料探し	1人

※1名による複数回答あり。

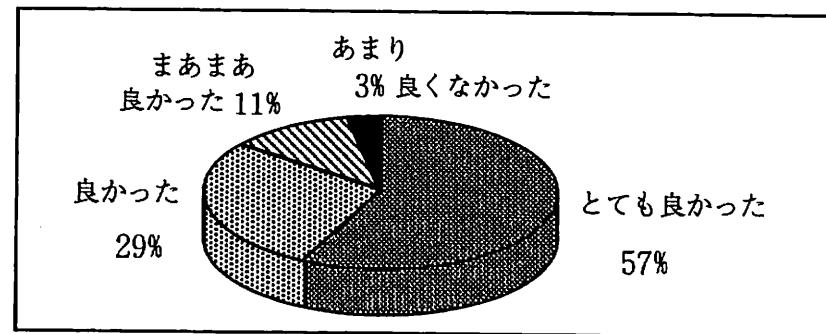


図6 合同発表会について

作業に費やされる時間、学習者の能力などを考慮した上でさらに検討し、適切な期間を設定しなければならない。

7-4. 報告会(3クラス合同)に関して

全体報告会に関して多くの学習者（約65%）が「よかったです」または「大変よかったです」と答えている（図6）。普段中級のクラスは3組に分かれて授業が進め

られており、交流する機会がほとんどないこと、また講師も自分の関わっているクラスの学習者としか接する機会がないことから、プロジェクト・ワークをコース全体の学習活動とし、横のつながりを持った意義は大きいと言える。

しかしその半面、3クラス合同ということで多人数となり報告会の時間が長くなってしまった点、また一つのグループの発表持ち時間や質疑応答の時間に制約ができたというマイナス面もあった。学習者の感想の中にもこのような意見があった。これはプロジェクト・ワーク実施前に懸念された点でもあったが、口頭発表練習を積み、発表を要領よく行えるように訓練をするなど解決策があると考えられる。

7-5. アンケート依頼について

アンケート調査を基にしたプロジェクト・ワークの過程で日本人と接触しコミュニケーションする場面は、調査

表5 アンケート依頼について

大変だった	大変じゃなかった
7人	26人

を依頼する場合である。それについてどうだったかを尋ねてみたところ、26名（表5）が「さほど困難は感じなかった」と回答している。「大変だった」と回答した7名の記述みると3名が「恥ずかしかった」と答えており、また「緊張した」、「アンケートをいやがる日本人学生も少ないがいた」と述べている。さらに図書館で調査表を配った学習者は、「勉強している学生は難しい、外国人が話しかけるとこわい顔をする学生がいる」などという感想を述べている。恥ずかしいという感想や緊張したという学生は、その学習者の性格的な問題である。また図書館で調査依頼をした学生は、場が悪かったと言えるだろう。図書館で勉強中に話しかけられるのは、それが日本人であろうと外国人であろうと嫌がられるのではないだろうか。図書館で調査を行う際にはラウンジで休憩を取っている人などをターゲットにするよう講師の側で指導すべきであろう。

プロジェクト開始前はアンケート調査場面で学習者が苦労するのではないかと懸念されたが、学習者は案外積極的であったようだ。目的を持っていれば、また日本人に話しかける材料があれば、見知らぬ日本人と接触し、コミュニケーションすることが苦にはならないと言えるのではないだろうか。

8. 学習者の自己評価

8-1. 協力度

自分がどれくらいグループの一員として協力できたかをパーセンテージで判定してもらった結果が表6である。協力度70パーセント以上と回答した学習者が約半数（22名）であった。自己に対して厳しい学習者とそうでない学習者がいるため、一概にこの数値でその人のグループへの貢献度を測ることはできない。またグループの人数によっても、個人個人の作業量という点ではらつきがあると判断される。しかし学習者の自己診断として意味のあるデータだと考えられる。講師の側から客観的にみると、協力的でなかった学習者はほんの数名にしかすぎず、ほとんどの学習者がグループ・ワークをきちんとこなしていた。この結果はそれを反映していると言える。

8-2. 報告会での発表について

口頭発表について、10点きざみの100点満点で自己評価してもらった（図7）。完璧である（100点）と自信を持った学習者はおらず、また全然だめであった（10点～20点）と全く自信の無い学習者もいなかった。一番多いのは、70点のまあまあだったと評価した学習者で10人となっている。また60点以下だと自己評価した学習者が11名いた。

他のグループの発表を聞いての感想の記述をみると、「内容の組み立て方がよくないグループがあった。声が小さくて、聞こえにくかった。発音がわかりにくかった。」という指摘がある。これは指導の不十分さの現れであると思われる。今回のプロジェクト・ワークでは、充分な口頭発表練習時間がとれなかつたことをプログラム運営上の反省点の一つとして挙げたが、今後その点に配慮をし、充分な時間をとることにより、満足のゆく発表ができる学習者が増えることが期待できるのではないだろうか。

表6 協力度

100%	8人
90	7
80	3
70	4
60	4
50	5
40	1
30	3
20	0
10	0
0	0

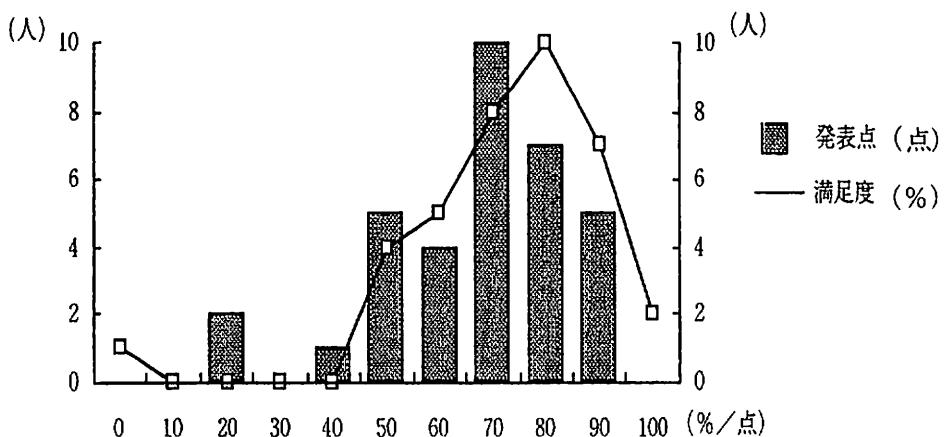


図7 発表の自己評価および満足度

8-3. 満足度

プロジェクト・ワークをやってみてどれくらいの達成感があったかを見るため、満足度をパーセンテージで示してもらった。80パーセント以上だと回答した学習者は、全部で19名で全体の約半数を占めている（図7）。さらに70パーセントくらい満足していると答えた者を含めると、全体の約3分の2に相当する27名になりプロジェクト・ワークを行った結果、日本語学習についての達成感が得られたとみることができる。60%以下に評価をした学習者の調査票をみていくと、グループワークにおける貢献度が低い者、すなわちプロジェクト・ワークのプロセスにおいてあまりグループ活動に参加しなかった者、あるいはできなかった者でプロジェクト・ワークへの参加度が低い者が満足度が低いという傾向がある。また、報告会において発表があまりうまくいかなかった等と自己の成果に対して不満の残った学習者が、満足度で低い数値を出している。全く満足が得られなかつたと答えた1人の学生は、先にもふれた内向的な学生で、プロジェクト・ワークという学習形態はその学生にとっては不満の残った活動であったことが数値の上でも示されている。

以上のことを総合してみるとプロジェクト・ワークの過程や報告会を通して

ほとんどの学習者が学習に対する何らかの達成感を得たと言えるだろう。

9. 講師による評価

学生側からのプロジェクト・ワークに対する評価は総じて良かったとするものが多く、学習者の立場からこのプログラムが外国語学習に効果があることがいくらか証明されたと言える。その学習者の意見と合わせてプロジェクト・ワークを進めた講師の側からの意見や反省点をまとめ、今後の参考となるよう改善すべき点を検討してみる。

9-1. カリキュラムとしての適切性

講師全員が、プロジェクト・ワークを中級段階での学習活動として適切であったと評価した。特にプロジェクト・ワークを実施してみて良かったと評価された点として次のようなことが挙げられた。

- (1) 日本語が生きたものになった。
- (2) 教師は単なるアドバイザーであり、通常の一斉授業では受け身である学習者が積極的に協力しあい、学習者自身の力で目標が達成できた。
- (3) 日本語を運用する力がついた。実際に日本語が目に見えて上達した学生もいる。
- (4) 学習者の中に自ずと学習活動の充実感、達成感が生まれた。
- (5) 学習者間の団結力や相互理解が生まれた。
- (6) 発表会の司会進行役を学生にさせたことは、自主性を持たせるためによかった。

客観的に観察した立場からも、学習者が興味・関心のあることについて探索し、まとめ、発表するという活動の過程において、プロジェクト・ワークが日本語学習の総合的な運用練習として非常に有効であったということができる。また学習者の知的レベルを満たす学習活動であったと考えられる。

コース全体として実施したことによりクラス内だけではなく、他のクラスとの交流や和作りにもなったと同時に、よい意味で競争意識が芽生え、学習達成動機が高められたのではないだろうか。報告会の後に多少はあるが飲み物と

食べ物を持ち込んでの交流会が持てたことも、学習者と講師両者にとって有意義であった。お互いの感想を述べ合ったり、労をねぎらうなど、相互理解を深めるためのいい機会となった。

さらに、普段と異なる学習者の側面が見られ、認識を新たにしたという意見もあった。これも学習者が主体となって活動することにより、学習者の個性が現れた結果であると言えよう。

9-2. 時間数および時期

2週間かけたカリキュラムであったが、5名の講師の中で「ちょうどよい」とする意見は1名であった。その理由として、それ以上の期間だと学習者の緊張感が持続しないのではないかという意見である。残りの講師は「長くしたほうがよい」とする意見で、2週間プラスあと1日程度という提案、3週間という提案に分かれた。期間に関してはプロジェクト・ワーク全体の活動を細かく検討し直し、適切な時間を割り出していく必要がある。その際に学習者の学習活動に対する興味の持続性、動機の持続性など情意面での学習への影響も考慮していくことが必要であろう。

夏休みに入る前日に発表会を開催するというスケジュールであったが、反省会を持ったり、発表の仕方に対するフィードバックを学習者に与える等の事後学習時間が設けられなかつたため、そのような時間が必要であると考えられる。またプロジェクト・ワークによる学習者の達成感が予想以上に高かったということは評価されてよい点であったが、その反面、コース自体が完結してしまったような感が強くなった。このような種類の大規模タスクとしてのプロジェクト・ワークはコースの中間目標とするより最終目標として設定するほうが適切であったかもしれない。

9-3. 困難点

プロジェクト・ワークを進める際、講師の側が感じた困難点としあは主に次のようなことがあげられた。

(1) プロジェクト・ワークに対する動機づけと動機の持続

- (2) グループ間の進度の調整
- (3) 調査結果のまとめ（レポート作成指導）
- (4) グループ内のディスカッションを促すこと
- (5) 一人の講師で限られた時間内で複数のグループの指導をこなすこと
- (6) 制限時間内で手短に効果的に発表するような指導

以上のような点は、講師間の話し合いや、実施回数を重ねることによって研究・分析し、対処法を見い出していかなければならない課題であろう。

10. 考察および今後の課題

本稿の試みによりプロジェクト・ワークが非常に効果的な四技能統合型、問題解決型の外国語教授法であることが明らかになった。

プロジェクト・ワークを通じて、通常の教室活動で何が足りないのか、どういう技能を伸ばしてやならければならないのかというさまざまな点が見えてきたことは、指導する側にとって非常に大きな収穫だったのではないだろうか。さらに普段あらわれない個々の学習者の弱点などを見い出すこともできた。このような点は、今後の授業内容に反映させていくことができるだろう。

プロジェクト・ワークを1回限りの活動ではなく、1度行ったプログラムを基に、発展的プロジェクト・ワークを実施する可能性も考えられる。平成5年度はアンケート調査によるプロジェクト・ワークを試みたが、日本人との接触量、またコミュニケーションの量を増やしていき、拡大していくような次の発展的段階の活動としては、インタビューによるプロジェクト・ワークが考えられる。これは、個人活動としてもグループ活動としても、またクラス全体の活動としても位置付けられ、その場合、一つのテーマに関して深く掘り下げることが目標となるであろう。今回行ったアンケートによるプロジェクト・ワークをFreed-Booth (1986) が提案する橋渡しの活動として捉え、学習の最終段階の仕上げとしてあるテーマに関する訪問インタビュー、ゲストスピーカーへのインタビュー、学習者同士のディスカッション、日本人とのディスカッション、ディベートなどを行うなど活動を拡張させていけばさまざまな可能性が広がる。その際にどのような学習者に対して、どのような状況の下で、どのような

形態のコミュニケーション活動が最も日本語の言語運用能力の養成のために効果的であるのかを研究していくことが今後の課題として考えられる。またその効果の測定法の開発も合わせて研究していくことが望まれる。

さらに大学に於ける日本語教育という環境を生かし、異文化間コミュニケーション教育の一貫として日本人学生のクラスとの合同プロジェクト・ワークまたはイマーション・プログラムも非常に有意義な学習形態ではないかと考えられる。このようなカリキュラムを実現可能にするためには、他教科講師との協力体制作りとコース・デザイン開発が今後の課題となるであろう。

今回は中級段階の日本語学習者に対するプログラムとして実施したが、初級段階の学習法としてもカリキュラムに導入できるのではないだろうか。プロジェクト・ワークは基本的に学習者が主体となって学習活動が進められるが、学習者の学習レベルに合わせて教師ロール重視型から学習者ロール重視型へと学習段階によって教師の役割の比重を変化させることにより、初級から上級まで、どの段階でも実施が可能であると考えられる。また学習者の構成や興味、関心、プロジェクト・ワークを行う時間数あるいは期間等の要素を考慮すれば様々な種類のプロジェクト・ワークとしてのタスクが可能となる。初級段階では、お国紹介、学校周辺のおいしいスポットのマップ作り、お国自慢料理大会、壁新聞作りなどが楽しく実施できるタスクの例である。中級のクラスのみでなく、初級レベルのクラスにおけるプロジェクト・ワークを試行し、その運営方法、教師の役割、教師の関与度、学習効果に関する研究も今後の課題であろう。

本プロジェクト・ワークの試みの反省点の一つとして、実施過程における教室内外での学習者の発話に対するフィードバックがほとんど行えなかったことが挙げられた。これは時間的余裕がなかったこと、またアンケートをとりにくく学習者にテープレコーダーを持たせる等の工夫がなかったなどが原因である。また多人数によるプロジェクト・ワークを実施したこともあり、教師がカバーできる範囲が限定されたことも問題の一つである。さまざまな制約された条件はあるが、今後徐々にでもテープレコーダー等の機材の道具立てを整備し、学習活動環境を整えていく工夫も、プログラムをより充実させ、最大限に学習効果をあげるために課題として忘れてはならないことである。

アンケート調査用紙や結果報告のためのレポートを書く段階でワープロを使用したグループもあった。プロジェクト・ワークへいたる授業過程においてワープロ指導なども取り入れられれば、書くことに対する動機づけが高まり、書くことに関する教育効果もあがる可能性がある。またワープロは外国人の日本語発音矯正のための道具立てとしても有効であると言われており、ワープロを利用することによって効果的な発話指導も可能であろう。その場合も学習者が充分練習できるよう機材をそろえていかなければならず、このような点でもハード面での充実を図る必要性があると言える。

プロジェクト・ワークの種類や目的によって、必要とされるカリキュラム項目は異なってくる。従ってプロジェクト・ワークを学習の総合的な訓練として位置付け学習効果をあげるために、プロジェクト・ワークにいたるまでの学習活動、カリキュラム構成を綿密に検討する必要性がある。実施経験を積み重ねていくことにより目標達成に必要な学習や活動が何であるのかを明らかにし、それを反映させるためにどのような学習活動やタスクがコース全体のシラバス項目として必要な要素なのかを吟味していけば、自ずと平素の授業の最適なコース・デザイン、カリキュラム設計ができあがっていく。このようにコースの目標とカリキュラムとが有機的に結び付いた授業設計を行っていくことも課題の一つである。

プロジェクト・ワークを終えた段階で各学習者の学習到達度を測ることは難しい。特に言語学習の面の進歩を測定することは、因難であると言われている。成果（発表）を評価することはさほど難しいことではないが、言語能力の伸びを測るためににはその学生の出発点の能力を把握し、終了時点との比較をしなければならない。田中・斎藤（1993）は学習者あるいは学習者のグループにテスティング・シラバスや評価基準を自動的に決めさせ、教師がそれにそったテストを実施すれば自律的な評価が可能であると提案している。また彼らは結果測定型の評価と過程分析型の評価が両方実施されることが望ましいと述べている。これはプロジェクト・ワークの性質上、その過程をも評価されるべきであるという指摘である。過程分析型評価のためには各学習者を個別に観察し記録をとるという観察法が考えられる。これは労力が必要であり、1人の教師では

時間的制約もあることから教室活動の様子をビデオにおさめておくなどの工夫をしなければ、実施が難しいと思われる。このようなプロジェクト・ワーク終了時の各学習者の個別評価法の開発も今後検討すべき課題の一つである。

【註】

- ¹ Kilpatrick, W. H (1918) *The project method*. Pumphlet, Teachers college, New York.
- ² 学習者に関する詳しい情報は、資料を参照のこと。
- ³ 基本的にはコース開始前のプレースメント・テストの結果によってクラス編成が行われる。
- ⁴ 1993年度の日本語Ⅲの担当講師は、赤嶺美恵子、高江州頼子、尚真貴子、長嶺明子の教養部非常勤講師と筆者の5人であり、各クラスを2名の講師で担当した。
- ⁵ 実際には、各クラスでの授業運営の都合上開始時期に1～2日のずれがあつたが、実質時間数は同じである。
- ⁶ オリエンテーションの時間に欠席した学習者の中で、実際にプロジェクトワークのプログラムの期間は授業に出なくてもよいか、と聞いてくる学生がいた。その学生には別途プロジェクトの目的や学習効果について説明を行うことにより参加を促し、動機付けを行った。
- ⁷ テーマを設定する話し合いの時点で、あるグループはどうしても意見が合わず、2グループに別れてしまった例がある。
- ⁸ プロジェクト・ワークは以下のトピックをテーマとして進められた。
(1)いじめについて、(2)両親の存在について、(3)ペットについて、(4)女性観について、(5)結婚相手の条件について、(6)お見合い結婚と恋愛結婚について、(7)キスについて、(8)性教育について、(9)卒業後の進路について、(10)初恋について、(11)喫煙について、(12)大学生について、(13)音楽について
- ⁹ なお、学習者の総数は45名であったが、アンケート用紙を提出しなかった学習者が数名いた。また質問によっては無回答の学習者がいたため、集計結果の回答者数の総計は一律ではない。

- ¹⁰ この学生は個別に何度か話し合い、またアンケート調査へはグループの人と必ずペアで行かせるなどして活動に無理なく参加できるよう配慮した。結果的には発表の際にはメモを見ずに話すなど積極的な態度がみられた。

引用および参考文献

- Freed-Booth, D. L. (1986) *Project Work*. Oxford: Oxford University Press.
- 倉八順子 (1993) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識に及ぼす効果（1）——一般化のための探索的効果—」『日本語教育』80号 日本語教育学会 49-61.
- 岡崎敏雄, 岡崎眸 (1990)『日本語教育におけるコミュニケーションタイプ・アプローチ』日本語教育学会編 凡人社
- 尾崎明人, J. V. ネウストブニー (1986) 「インターラクションのための日本語教育 —イマーションプログラムの試み—」『日本語教育』59号 日本語教育学会 126-141.
- 森正義彦 (1993)『学習指導法の心理学』 有斐閣
- Riverse, W. M. (1987) *Teaching Foreign-Language Skills*. Second edition. Chicago: The University of Chicago Press.
- 島岡丘, ジョン・デニス (1986)『統合的英語教授法 —Integrated Approach—』大修館書店
- 田中 望 (1988)『日本語教育の方法 —コース・デザインの実際—』大修館書店
- 田中望, 斎藤里美 (1993)「プロジェクトワークによるコースワークと自己評価」『日本語教育の理論と実際 —学習支援システムの開発—』大修館書店 139-161.
- バルタン田中幸子, 猪崎保子, 工藤節子 (1988)『コミュニケーション重視の学習活動 1 プロジェクト・ワーク』日本語教育研究会資料シリーズ 編集委員会編集 凡人社
- Widdowson, H. G. (1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford: Oxford University Press.

資料 学習者に関する資料

1. 人 数

	男	女	計
1組	8	6	14
2組	11	7	18
3組	6	7	13
計	25	20	45

2. 国 稷

中 国	14人
台 湾	10
フィリピン	5
韓 国	3
タ イ	2
アルゼンチン	2
ブラジル	2
シンガポール	1
インドネシア	1
香 港	1
カナダ	1
オーストリア	1
オーストラリア	1
ボリビア	1

3. 身 分

聴 講 生	34人
研 究 生	3
学 部 生	5
大 学 院 生	3

5. 学習目的

4. 受け入れ別

国 費	3人
県 費	8
私 費	12

学部進学	22人
大学院進学	5
仕事のため	3
大学での研究・学習活動のため	8
日本研究	1
興味	5

Summary

A Study on Integrated Approaches for Teaching Japanese as a Foreign Language — Project Work —

KINJO, Naomi

A "project work" program was introduced in Japanese Language Course III (an intermediate level course) in 1993 at the University of the Ryukyus. Project work differs from other methodologies in that it is a learner-centered communicative approach. The purpose of the project work is to develop the learner's communicative performance and language skills. The goals of project work as a group activity are (1) to collect information about a theme that learners have an interest in, (2) to use Japanese as a tool for discussion, (3) to write questionnaires and reports, and to communicate with Japanese students in doing the research, and (4) to make a presentation about the results of the research. This paper discusses the significance of project work, the design of our specific procedures, the students' evaluation of the program, and some practical classroom considerations. This study suggests the successful continuation of this new approach to foreign language learning.